

水族館へ行こう!

京都大学白浜水族館

55

白山 義久

タコアシサンゴ



水深100mくらいに生息するタコアシサンゴ (水槽番号228)

第2水槽室の小型水槽の中に、ひときわ鮮やかなオレンジ色をした、イソギンチャクのような生き物が展示されている。タコアシサンゴという単体性イシサンゴの仲間だ。

イシサンゴ類の大部分は、サンゴ礁を造るいわゆる造礁サンゴ類である。この仲間は体内に褐虫藻という光合成をする単細胞生物を共生させていて、体内で増殖したこの生物を餌として消化吸収している。

光合成には光が必須

悠久の時を過ごす動物

性イシサンゴ類の仲間は、もっと深い深海にも生息している。そして彼らは白浜水族館のタコアシサンゴのように、海底で触手を広げていたに違いない。なぜならば深海底の写真を解析すると、イソギンチャクのような動物がたくさん見られるが、生物採集してもイソギンチャクはほとんど捕れず、単体性イシ

深海性イシサンゴ類が5センチになるのに700年かかったと推定されたこともある。水深約1000mとやや浅い所に生息しているとは言え、水族館で展示されているタコアシサンゴも、きっと悠久の時を海底で過ごしていたに違いない。

(京都大学瀬戸臨海実験所長)

であるため、造礁サンゴ類が生息できるのはせいぜい水深20mくらいまでである。

一方、タコアシサンゴが生息している場所は光の届かない水深100mくらい。だから褐虫藻は共生していない。彼らの主要な餌は、海底に落ちてきた植物プランクトンの死骸(しがい)やそれを食べた動物プランクトンのふんなどの、いわゆるマリンスノーだ。

サンゴ類の骨格がしばしば採集されるからである。実物の生物試料を採取することの大切さを、わたしはこの貴重な経験から学んだ。

タコアシサンゴのような単体

水深1000mを超えるような深海では餌の量が表層に比べてはるかに少ない。また水温が低い。これらの要因が重なって、深海生物の成長はものすごく遅い。大きさが1センチ余りの二枚貝の年齢が100歳を超えていたという報告がある。ある種類の